

☆10月・11月・12月・1月の活動☆

採集観察会のお知らせ 八王子城跡

第三回 10月22日(日) 午前10時集合

集合地点: JR中央線 高尾駅 北口 雨天決行

(JR中央線 新宿より特快で42分、快速55分)

ちなみに第四回は 2月18日(日)午前10時集合。

世話人は新海明(TEL. 0425-22-2605)・板倉泰弘(TEL. 0474-82-8921)

今号に5月と
7月の観察記録
が出てます。

合同例会の案内

期日・所 11月22日(日) 午前10時開会

会場 駒場住区センター(これまでの大橋区民会館ではありませんので御注意!)

交通 別記の地図を参照して下さい。

同封の葉書で出欠・講演の有無を御連絡下さい。

世話人は事務局・熊田憲一(TEL. 045-413-3375)

キシノウエトタテグモ探検会

当初の予定通り、1989年6月17日(土)の午後、東京大学構内で行われた。案内および賛助は日本蜘蛛学会会員で東京大学農学部の宮下直氏。参加者は15名を数えた。集合地点である赤門のすぐ近くの医学部前の花壇で、たくさんの個体が発見された。その後に見て回った、工学部前や農学部付近では生息を確認できなかった。午後6時15分から農学部林学科の会議室で勉強会を行なった。講演は新海明「トタテグモ類の生活史」、牧孝匡「キシノウエトタテグモの生活史」(その後Atypus 94号に発表された)、宮下直「岸上鎌吉氏と東京大学」。夜食代わりにパンひとつと若干のお菓子を食べ、飲物を若干飲んだだけで、午後9時30分まで活発な討議が行われた。参加者のパワーに脱帽。新海明氏が会誌に報告の予定(池田記)。

5月の観察会(八王子城跡)報告

5月21日(日) 晴りのち晴れ

参加者: 磯部達男、稻葉茂代、大石征夫、大石[○]、大塚[○]、小野展嗣、熊田憲一、小峰光弘、笹岡文夫、新海明、高橋登、谷川明男、長島忠義、古浜隆、本木洋子

12年ぶりに行われた八王子城跡での観察会ですが、その当時とはメンバーも多少変わりました。平均年齢が上がりパワーも落ちたような気もしますが、なんとか111種ほどのクモを確認することができました。やはり、場所が良いのでしょうか。

採集観察したクモの仮リスト(F♀成体, f♀亜成体, M♂成体, m♂亜成体, n幼体)順不同。

ユノハマサラグモF, クスミサラグモF, アシナガサラグモn, ヘリジロサラグモF, シリサラグモMf, アシヨレグモ, ザラアカムネグモF, タマヤミサラグモFM, ズキンヌカグモの一種F, ケシグモの一種F, カラフトオニグモfn, ヨシテゴミグモFMf, メガネドヨウグモFn, アオオニグモF, カラオニグモn, ヤマシロオニグモn, ヤマオニグモn, ハナオニグモf, サガオニグモFf, オニグモFn, ヤマトカナエグモM, ワキグロサシマノミダマシn, ギンメッキゴミグモF, コガネグモn, トガリオニグモn, ヤミイロオニグモn, ゴミグモF, ハツリグモn, ヤマジグモn, トリノフンドマシの一種n, コガネグモ科の一種FM, クサグモn, ヤマヤチグモn, コクサグモn, ホラズミヤチグモF, フタオイソウロウグモn, オナガグモn, ムナボシヒメグモFn, ホシミドリヒメグモFf, ヤリグモF, コケヒメグモF, シクネグモF, ムラクモヒシガタグモf, ポカシミジングモn, シモフリミジングモn, カニミジングモFM, コアカクロミジング

また、「楽しみ方はそれぞれに」という文章の中に”珍しいものに出会ったり珍品を手に入れた時の嬉しさは何も鳥の場合だけではない。決して rarity hunterにはなりたくないが、珍しい鳥に出会った時の感激は否定できないし、この感激をおぼえない人は、野鳥観察者として長続きしないように私には思える”という言葉がある。この言葉はクモ観察者にも当てはまるだろう。談話会の観察会が初心者に果たす意義もこの辺にあると私は思う【池】。

松良俊明『砂丘のアリジゴク』（思索社）

著者はこの本の中に、こう書いている。

”クモという小動物は多くの人に嫌われているが、私にとっては興味深い虫である。彼らは全て捕食者であり、餌捕獲法も円網を張るもの、棚網を張るもの、穴を掘って潜んでいるもの（ちょうどマンホールの蓋を少し開けて餌の到来を監視しているようなクモ）、歩き回るものなどなど、実にバラエティーに富んでいる。（中略）巣穴をつくるアリジゴクと巣網を張るクモには、いくつかの共通点がある。待ち伏せ型であること、トラップを作るのに大きなコストを払っていること、待ち伏せ中の呼吸量が非常に小さいことなどが共通している（ルーカス、1985）。さらに、両者とも人間にとて発見しやすいという利点も持ち合わせている（p121）”。

クモと共に通する部分が多く、研究方法が参考になります。（2060円）【池】

吉谷昭憲『とっくりばち』（偕成社）かがくのとも

かがくのとも1989年9月号は本会会員でもある吉谷さんの『とっくりばち』。絵・文ともに吉谷さんの手になる力作です。【池】

クモあれこれ(2)

笹岡 文雄

(1) クモと戦闘機

1941年1月、アメリカのノースロップ社は自国の陸軍航空隊のために、重武装でレーダーを装備した大型の双発機を開発した。これが第二次世界大戦中、アメリカ軍唯一の夜間戦闘機ノースロップP-61である。前線配備は1944年の夏にされこんだが、その名の通り夜間における敵機迎撃に活躍し、そのすばぬけた性能はこの機種としては最高のものであった。その乗員は3名で、胴体上下部に各4丁の機銃を装備し、終戦までに700機ほど生産された。

ところで古くからアメリカの軍用機は様々な名称がつけられ、このP-61も例外ではなく、特にその容姿から命名されている。P-61は夜間作戦専用に使用されるために、多くの機の機体全体が半光沢の黒塗りであった。その外見と強武装から、ブラック・ウイドーと呼ばれることになる。当時各国で活躍した夜間戦闘機で、このブラック・ウイドーのように、機体全体を黒く塗っていたものはない。ただP-61には一部にこげ茶や灰色に塗られていた機もあり、もしこれらの色が主流であったなら別のニックネームがついていたかもしれない。アメリカを始め多くの国で軍用機にニックネームをつけているが、現在にいたるまでこのP-61のようにクモの名を冠したものは見あたらない。ちなみに日本の夜間戦闘機といえば、海軍の”月光”であった。（図1）

(2) 図2は『ニーチェと哲学的考察』というフランスのペーパーバックの表紙絵です。出典は中世の絵画のようですが明らかではありません。またニーチェとクモの関係も不明です。図3は文春ノンフィクション第2号（1987.12.10発行、106p）の七十三人の視点という章の見出しだけです。原図の写真ではかすかに円網が確認できたのですが、コピーではごらんのとうりになりました。種類はオニグモと思われます。（1989.8.24記）

[クモあれこれ(1)は前号で池田博明・小池牧子の記事を紹介しました。]

クモに関する質問 数ヶ所で、クモのはなしをした時に一般の聴衆から出た質問

クモの枠糸に縫糸をつける結合部はどうなっているのか？ 網は始め糸がたるんでいるがどこでたるみを取るのか？ 隠れ帯のはたらきはなにか？ ナガコガネグモの分散はアリの結婚飛行のよ

た、だいいちOHPという考えは当日、座間市に向かう車の中で思いついたものである。

第四はこれが決定的なだが、クモがちゃんと餌を探ってくれたことである。おまけに威かく行動もしてくれたのである。最初にシャーレにマミジロハエトリのオスを入れ、そのままOHPに載せて投影する。ハエトリは動きが可愛いのでシルエットでもちゃんと絵になる。ショウジョウバエを入れたら、ハエの方を向いた。ところが探る瞬間を私の頭の影が邪魔してしまった。頭をどかしたら既にクモはハエをつかまえた後だった。この時の子供の失望感といったらなかった。せっかくの機会を見れなかつたのだ。ごめん、ごめん、じゃあ、やり直し。今度はアオオビハエトリのオスと力を入れた。みんな真剣にスクリーンを見つめる。ところがクモは力を探らない。そちらを向くのだがとびつかないのだ。「これは力が大きすぎるからだよ」と説明して、次にヨコバイを入れる。ヨコバイが動く。クモが近づく。しかしヨコバイはじっと動かないという防衛戦略を取っているようである。クモはそばを通りすぎたのに、「あれれ」、全然関心を示さないのであった。こうなつたらショウジョウバエである。三度目の正直、とうとう探りました! 「ハエトリには動かないものは探れないものである」。

続いてオスとオスの威かく行動実験。いわゆるクモ合戦である。いまハエを探ったアオオビハエトリのオスのシャーレに別のアオオビハエトリのオスを入れてやる。少し小型の個体である。やつた! 小型のクモは第1脚をふりあげ始めた。シルエットでもはっきり分かる。相手のクモも脚をあげた。脚先をピクピクさせながら、左右にジグザグに動く。大型の方が前進すると小型の方がさつと後退する。あざやかな動きである。実は私も井伊さんの論文では知っていたが実際に見たのは初めて。メスに対するダンスと前半が共通である。実況中継しながら見ていると思わぬ展開になってきた。小型の個体が何度も大型の個体に向かっていくのである。影の動きを見ていたも大型個体がひるんでいる様子が分かった。「あいつ、ガツがあるなあ」という賛嘆の声がもれた。まったくだ、ヤッタね!

実験はこれで終わり。求愛の話をしておいたため、メスと組み合わせようという声が出たが、それはやらなかった。アオオビの確実なメス成体がいなかつたので、オス同士がこれだけうまくやってくれたのだから、感動したところで終わるのがよからう。クモ合戦に熱狂したという齊藤慎一郎さんの気持ちが理解できたような気がした。オスーメス行動は宿題にしておいた。

最後に網の張り方のポイントをムラクモヒシガタゴモで話した。前の糸を切って新しい糸を張ることを強調した。なにしろそんなことは、つい最近、新海明さんに教わるまで私も知らなかつたのだから。

小学生や中学生ってほんとに元気で正直ですね。高校生ばかり相手にしている私にはスリリングな体験でした。OHPはとっても便利な機械です。たくさんの人に行動を見せるうつつけですね。もっとも、こんなにもOHPの上で、クモがよく行動してくれることも、もう無いかもしれません。よくケンカしてくれたガツのあるクモは講演後に欲しがった男の子に2頭とも、あげました。『クモ基本50』が15冊、ルーペも12個、売れました。

1989.6.25

追記; その二日後、城内高校生物室で、別のアオオビのオスはメスに求愛・交尾してくれました。「生物」の質問に来た1年の女子2人に見せてあげたところ、最初はクモはきらいと言っていましたが、クモ合戦の話を授業したことでもあり、アオオビが脚をあげると「ほんとだ!」と喜んで見ていました。「この位の大きさならこわくない」そうです。8ミリVTRにも収録できました。

※座間公民館『ウォッキングニュース』No.2・No.3より転載。「わたしは、先生のせつ明の時、とてもうれしかったです・とても良くわかりましたし、OHPやもけいも見せてくれました。びっくりしたことがあります。それは「くも」について学者がまちがえたこと。みわけにくいもの、まだ知らないものがあったことです。説明してくれた先生はそんなことも教えてくれました。また公民館でこういうことをやってください(奥田瑞穂; 小学5年)」「僕は以前からクモなどの生物に興味を持っていたので、参加してみた。少し前まではクモは気色悪くて近寄らず、触ってみると無かった。今回探ったオニグモも、隠れ家から引っ張り出すと、「つうーっ」と下がってきて、

池田 博明

神奈川県座間市の公民館でクモの話をした。本会会員の諒訪哲夫さんが公民館の「ふれあい自然科学クラブ」の第1回に「スパイダー・ウォッティング」を企画してくださったものである。当日(1989年6月25日、日曜日)は28名の親子が参加を予定、そのうち小学生は15人、中学生が3人のはずであった。ところが、前日までの雨のため、ボーイ・スカウトの下部隊が参加することになってしまった、参加者が一挙に50名近くなった。小学生相手に話したことなど一度もないのに、加えて低学年が多いとなるといつたうまい話を持っていったらしいのであろうか。公民館の植松さんの「よろしいでしょうか?」というおたずねに「ええ、何人でも」と平静をよそおって答えたものの、内心不安であった。小さな講座室に人がいっぱいになり、最初、肉声で十分と思って話し始めたが、すぐにマイクを必要としたほどであった。

しかし、始めてみるとみんな熱心に聞いてくれた。

その原因の第一は参加者がクモを採集してくれたことであろう。このアイデアは諒訪さんのものである。最初に参加者が持参したクモの種類に即して説明をした。参加者にはルーペと『クモ基本50』を貸した。昆虫との違いについても一応模造紙に描いたものを持っていったが、実物が目の前にあるのだから一目瞭然である。「昆虫は足が6本、ではクモは何本?」と質問すると、「ハイ!」と元気よく手があがる。ジョロウグモの幼体もあったので、『クモ基本50』でジョロウグモが何頁に出ているかを競争で探してもらった。あっという間に見つける子供がいる。その後、よく見ていると、その子はまず索引を見るのだった。堂にいった図鑑の使い方をしているわけで、早いのも当然である。この子は中学1年生だった。

第二は生きたハエトリグモをたくさん採集しておいたことである。5月28日の湘南平の江南高校の採集会で江南生に協力して探ってもらったアリグモやアオオビハエトリ、新海明さんが探ってくれたアリグモの雌雄、私の妻が一昨日に雨の中、家の周りで探ってくれたシラヒゲハエトリやチャスジハエトリ等、それらを全員がルーペで見て、クモでも種類によって形がちがうこと、特に目がちがうこと、そして徘徊性種についての話が出来た。参加者が持参したクモはオニグモなど造網性種が多かった。ハエトリの中にササグモを入れておいたら、ちゃんと見分けた女の子がいた。「先生、これ、ちがいます」と、その通り、君はクモ観察の天才だ! こういう子が出ると、ますますみんな観察に一生懸命になる。あちこちで「先生、これもハエトリじゃないよ」という声が出る。見てみるとほんとにハエトリではない。サンプルをちゃんとチェックしないで渡してしまったので、ハエトリ以外の徘徊性種も回覧してしまったのだ。まあ、でも怪我の巧妙である。全部、最初からわざと違うクモを混ぜておいたことにした。

第三はOHP(オーバー・ヘッド・プロジェクター)が使えたことである。ただ話をするだけでは、つまらない。だいいち私が聞き手ならすぐに眠ってしまう。予定ではハエトリグモの求愛行動を見せようと思っていた。成体オスと処女メスがいれば絶対うまくいくはずだからである。ところが現実はきびしいもので、丁度よい雌雄が探れないのだ。幼体はよく探れるのだが、亜成体となると思うようにはいかない。そこで前日に計画変更、ハエトリグモの餌採り芸とオス同士のクモ合戦を見せることにした。前夜に餌採りテストをしてみたら、シラヒゲハエトリはまったくハエを無視している。まあ、明日にはなんとかなるだろうとあまり心配しないことにした。当日の朝は、早くから公民館付近のお寺でハエトリの餌探し、石垣上でヨコバイを沢山探った。これで準備は整ったものの、これまでいざ餌採りを見せるだけでもうまくいかない場合があったのを思い出す。ひょっとすると餌を探るクモは少ないかもしれない。公民館で聞くとOHPがあるという。それなら1頭だけの行動でもみんなで見ることができる。早速OHPを用意してもらった。結果的に人数が増えたうえに講座全体のガイダンスもあり、使える時間は1時間20分程度、到底自分たちそれぞれで実験してみる時間は無くなってしまった。これまで授業でやった経験では高校生でも餌採りを見るだけでも、クモを用意したり、ハエを用意したり、やり直したりしていると30~40分はかかるのである。もっとも、OHP上でクモがどう見えるのか、一度もやったことがないので、知らなかつ

た。だいいちOHPという考えは当日、座間市に向かう車の中で思いついたものである。

第四はこれが決定的なのが、クモがちゃんと餌を探ってくれたことである。おまけに威かく行動もしてくれたのである。最初にシャーレにマミジロハエトリのオスを入れ、そのままOHPに載せて投影する。ハエトリは動きが可愛いのでシルエットでもちゃんと絵になる。ショウジョウバエを入れたら、ハエの方を向いた。ところが探る瞬間を私の頭の影が邪魔してしまった。頭をどかしたら既にクモはハエをつかまた後だった。この時の子供の失望感といつたらなかった。せっかくの機会を見れなかつたのだ。ごめん、ごめん、じゃあ、やり直し。今度はアオオビハエトリのオスと力を入れた。みんな真剣にスクリーンを見つめる。ところがクモは力を探らない。そちらを向くのだがとびつかないのだ。「これは力が大きすぎるからだよ」と説明して、次にヨコバイを入れる。ヨコバイが動く。クモが近づく。しかしヨコバイはじっと動かないという防衛戦略を取っているようである。クモはそばを通りすぎたのに、「あれれ」、全然関心を示さないのであった。こうなつたらショウジョウバエである。三度目の正直、とうとう探りました!「ハエトリには動かないものは探れないものである」。

続いてオスとオスの威かく行動実験、いわゆるクモ合戦である。いまハエを探ったアオオビハエトリのオスのシャーレに別のアオオビハエトリのオスを入れてやる。少し小型の個体である。やつた!小型のクモは第1脚をふりあげ始めた。シルエットでもはっきり分かる。相手のクモも脚をあげた。脚先をピクピクさせながら、左右にジグザグに動く。大型の方が前進すると小型の方がさつと後退する。あざやかな動きである。実は私も井伊さんの論文では知っていたが実際に見たのは初めて。メスに対するダンスと前半が共通である。実況中継しながら見ていると思わぬ展開になってきた。小型の個体が何度も大型の個体に向かっていくのである。影の動きを見ていても大型個体がひるんでいる様子が分かった。「あいつ、ガツツがあるなあ」という賛嘆の声がもれた。まったく、ヤッタね!

実験はこれで終わり。求愛の話もしておいたため、メスと組み合わせようという声が出たが、それはやらなかった。アオオビの確実なメス成体がいなかつたので、オス同士がこれだけうまくやつてくれたのだから、感動したところで終わるのがよかろう。クモ合戦に熱狂したという斎藤慎一郎さんの気持ちが理解できたような気がした。オスメス行動は宿題にしておいた。

最後に網の張り方のポイントをムラクモヒシガタグモで話した。前の糸を切って新しい糸を張ることを強調した。なにしろそんなことは、つい最近、新海明さんに教わるまで私も知らなかつたのだから。

小学生や中学生ってほんとに元気で正直ですね。高校生ばかり相手にしている私にはスリリングな体験でした。OHPはとっても便利な機械です。たくさんの人に行動を見せるうつってつけですね。もっとも、こんなにもOHPの上で、クモがよく行動してくれることも、もう無いかもしれません。よくケンカしてくれたガツツのあるクモは講演後に欲しがつた男の子に2頭とも、あげました。『クモ基本50』が15冊、ルーペも12個、売れました。 1989.6.25

追記: その二日後、城内高校生物室で、別のアオオビのオスはメスに求愛・交尾してくれました。「生物」の質問に来た1年の女子2人に見せてあげたところ、最初はクモはきらいと言っていましたが、クモ合戦の話を授業したことでもあり、アオオビが脚をあげると「ほんとだ!」と喜んで見ていきました。「この位の大きさならこわくない」そうです。8ミリVTRにも収録できました。

※座間公民館『ウォッチングニュース』No.2・No.3より転載。「わたしは、先生のせつ明の時、とてもうれしかったです・とても良くわかりましたし、OHPやもけいも見せてくれました。びっくりしたことがあります。それは「くも」について学者がまちがえたこと。みわけにくいもの、まだ知らないものがあったことです。説明してくれた先生はそんなことも教えてくれました。また公民館でこういうことをやってください(奥田瑞穂; 小学5年)」「僕は以前からクモなどの生物に興味を持っていたので、参加してみた。少し前まではクモは気色悪くて近寄らず、触ってみることも無かつた。今回探ったオニグモも、隠れ家から引っ張り出すと、「つうーっ」と下がってきて、

僕は一瞬ドキッとしてしまった。気色悪いこともあるって間近に見ることもなく、詳しいこともあまり知らなかった。今回のウォッチングでは、かなり詳しいことも知ることができ、本当に良かった。特に、クモの雄雌を見分けることができるのには驚いた。「雄」か「雌」かは「触肢」の先が発達しているかしていないかで、見分けることができるのだ。今では、クモを探ってきては、ルーペを使って、雄雌を見分けることもできる。だが、残念なことに、見知らぬ大勢の人間たちにいじくりまわされて、弱っていたオニグモが、クラブが終わった次の日、天国へと旅立っていった。でも、沢山の知識を授けてくれた池田先生とクモに僕は感謝している（稻垣禎：中学1年）」

訃報 大井良次氏、御逝去

日本のサラグモ類の分類学のパイオニアであった大井良次先生（元大阪市立大学、梅花女子大学教授）は、平成元年5月20日に、ご病気のため84歳でお亡くなりになりました。先生はわれわれになじみの深い多くのサラグモ類ばかりでなく、イソタナグモ、オキツハネグモ、ヨロイヒメグモなどいろいろなクモを命名されています。また、*Oia*（オオイサラグモ属）はドイツのヴァンダーリヒ氏によって、大井先生に献名されたものです。チビスキオオグモというのは小澤実樹さんがつけた大井先生のあだ名ですが、大井先生の研究は、斎藤博さんはじめ多くのチビスキ研究者によって受け継がれ発展することでしょう。ご冥福をお祈り致します。

（本部・小野記）

おたよりの一部を紹介します

『クモのはなし』について

◆斎藤慎一郎氏（神奈川県大和市）：私ども素人にもわかりやすい語り口で高度の内容を読ませていただき、一読、再読し、これから三読にかかりたいと思っています。まさにクモを愛するものの坐右の書。しかもこんなにスバラシイ本の一章をさいてクモ合戦とネコハエトリの話題を御執筆下さい、私めの拙い研究につき要を得た御紹介にあざかりましたこと、深謝に耐えません。特にうれしかったのは、地取り期を認めて下さったこと、小屋掛け求婚にふれて下さったこと、「クモ合戦文化」と「土グモ文化」の仮説を御紹介下さったこと、加藤光太郎さんの名前を記録にとどめて下さったことなどで、私の最も主張したかったことを的確に記述していただけましたのは全くありがたいと喜んでおります。私以外の誰が研究したとしても結果は同じになるはずで（加藤さんは惜しくも亡くなられましたが、もっとも御子息が健在ですが）、多くの人たちが、ネコハエトリという魅力あふれるクモに興味をもって下さり研究して下さると嬉しいです。春一回の成熟でネコハエトリ前線が描けるくらい鮮やかな出現の仕方をすることや、セクシャアル・ディモーフィズム、またディスプレーの悠然たるベース、複雑さなど、研究対象としてネコハエトリは驚異的な（扱いやすい）特質をそなえていますね。ともかく愉快な話題としてじっくりお書き下されたおかげで、ネコファンがふえそうなのに気をよくしています。 1989.5.31

[斎藤さんの著作『クモ合戦の文化論』（大日本図書）,『クモの合戦』（未来社, 川名興氏と共に著）を是非お読み下さい。『クモの合戦』の思い出の章は教科書に載るべき名文です。池田記]

◆高野ツヤ子氏（東京都日野市）：友達とこんな本を待って居たのだと大喜び致しました。この御本で多くのクモ好きが生まれることでしょう。東南アジアの学生の中では、私の交流した限りではまだクモ好きに会えませんでした。日本人でもクモは何でも毒があると思って居る人も居ますし‥私は私の小さな世界の中でクモの事を話しています。何時か芽の出る事もあると信じて。

一人で暮して居ると庭のクモでもカナヘビでも何でも同居人としてとても嬉しく思います。主人が捕虜の時、ハチやクモや鳥に喜びを見出して居たのが良く分ります。

この御本も沢山の友達に宣伝致します。 1989.5.30.

◆浜口哲一氏（神奈川県平塚市）：早速読ませていただきました。“こんな点がまだわかっていない

い”ということがたくさん紹介され、研究の指針が示されていて素晴らしいと思いました。 19
89.6.12

◆貝発憲治氏（三重県松阪氏）：『クモのはなし』を早々に読ませていただきました。一般向きとしても、また専門家向きにも大変興味ある内容にまとめられ、執筆には大変御苦労されたこと思います。シノビグモの記述の部分も、専門的な見地から書かれると、大変深い内容のものにまとまるものだと敬服いたしました。今、生物部員にも読ませて勉強させているところです。すばらしいクモの参考書ができたことをうれしく思います。 1989.6.15

◆千国安之輔氏（長野県豊科町）：学会の若手エキスパート数人での共著であり、なかなか立派な内容に感服し、敬意を表しています。

最近の知見を多く盛り込まれて素晴らしい参考書です。クモに興味・関心を持つ人が増えることを信じ、御同慶の至りに存じます。 1989.7.10.

[『クモのはなし』所収「似てない夫婦」のもとになった研究が『八木沼健夫教授退職記念論文集』に寄せられています（千国安之輔「日本産ガケジグモ科、コガネグモ科およびハエトリグモ科の興味ある数種」）。]

新刊案内 八木沼健夫教授退職記念論文集と続・蜘蛛の糸

八木沼健夫先生は本年3月31日をもって、追手門学院大学を退職されましたが、それを記念してこのたび『続・蜘蛛の糸』と『八木沼健夫教授退職記念論文集』の2冊が刊行されました。内容は、前者の方は八木沼先生が新聞や雑誌にお書きになった啓蒙・解説記事の再録（130頁），後者は先生から指導をうけた研究者による論文集（西川喜朗・小野展嗣両氏編，196頁）です。千国安之輔氏はじめ談話会会員でもある多くの方々の論文18篇のほか、八木沼先生の年譜や著作目録も載っています。部数に限りがあるそうですが、下記でまだ入手できます（2冊組7000円）。

（本部・小野記）

八木沼先生退職記念論文集刊行会

〒567 大阪府 茨木市西安城2-1-15 追手門学院大学生物学研究室

西川喜朗 教授 TEL. 0726-43-5421

「振替 大阪2-78669 八木沼先生退職記念行事世話人会」

いよいよ刊行！千国安之輔『写真日本クモ類大図鑑』（偕成社）

いまかいまかと刊行が待たれていた写真図鑑が10月下旬、とうとう出版の運びとなった。粗見本を見るとますます期待がつのる。オスの触肢やメスの外雌器が写真で示された図鑑は世界にも例がない。偕成社の力のいれかたも並々ならぬものがあるようだ。粗見本は近日中に日本蜘蛛学会員に発送されるという。

値段は28,840円。ずいぶん高いと思う人もいるかもしれないが、私にはそうは思えない。この図鑑のおかげで私たちがこうむる恩恵は2～3万円では、きかないからだ。父がよく言っていた。勉強に必要なものなら、たとえその中の1行だけが必要だとしても、何万円を出しても買いなさい。勉強するのにお金を惜しむことはないと。

3万円としたって、1日にすれば100円足らずである。迷わず買いなさい！〔池〕

（注文は取扱い書店を指定の上、偕成社へ。TEL.03-260-3221. ファックスなら03-267-0124.）

高野伸二『野鳥を友に』（朝日文庫）

KISHIDAIAに高野先生が書かれた小観察は興味のつきないメモに満ちていた。この本（1985年出版の文庫版）には「クモと鳥」（『野鳥』1977.1～3）が収められている。高野先生はきっと狩りバチへの興味から狩られる方のクモへと進まれたのであろうと勝手に思っていた私は、「クモと私」の冒頭，“私は幼いころからクモが大好きであった。四、五歳の頃にはあきびんを並べてそれにクモを飼うのが楽しみで、いわゆるおもちゃは要らなかった”とあるのを読んで、自分の不明を恥じた。

また、「楽しみ方はそれそれに」という文章の中に”珍しいものに出会ったり珍品を手に入れた時の嬉しさは何も鳥の場合だけではない。決して rarity hunterにはなりたくないが、珍しい鳥に出会った時の感激は否定できないし、この感激をおぼえない人は、野鳥観察者として長続きしないように私には思える”という言葉がある。この言葉はクモ観察者にも当てはまるだろう。談話会の観察会が初心者に果たす意義もこの辺にあると私は思う【池】。

松良俊明『砂丘のアリジゴク』（恩索社）

著者はこの本の中に、こう書いている。

”クモという小動物は多くの人に嫌われているが、私にとっては興味深い虫である。彼らは全て捕食者であり、餌捕獲法も円網を張るもの、棚網を張るもの、穴を掘って潜んでいるもの（ちょうどマンホールの蓋を少し開けて餌の到来を監視しているようなクモ）、歩き回るものなどなど、実際にバラエティーに富んでいる。（中略）巣穴をつくるアリジゴクと巣網を張るクモには、いくつかの共通点がある。待ち伏せ型であること、トラップを作るのに大きなコストを払っていること、待ち伏せ中の呼吸量が非常に小さいことなどが共通している（ルーカス、1985）。さらに、両者とも人間にとて発見しやすいという利点も持ち合わせている（p121）”。

クモと共に通する部分が多く、研究方法が参考になります。（2060円）【池】

吉谷昭憲『とっくりばち』（偕成社）かがくのとも

かがくのとも1989年9月号は本会会員でもある吉谷さんの『とっくりばち』。絵・文ともに吉谷さんの手になる力作です。【池】

クモあれこれ(2)

笛岡 文雄

(1) クモと戦闘機

1941年1月、アメリカのノースロップ社は自国の陸軍航空隊のために、重武装でレーダーを装備した大型の双発機を開発した。これが第二次世界大戦中、アメリカ軍唯一の夜間戦闘機ノースロップP-61である。前線配備は1944年の夏にずれこんだが、その名のとうり夜間における敵機迎撃に活躍し、そのすばぬけた性能はこの機種としては最高のものであった。その乗員は3名で、胴体上下部に各4丁の機銃を装備し、終戦までに700機ほど生産された。

ところで古くからアメリカの軍用機は様々な名称がつけられ、このP-61も例外ではなく、特にその容姿から命名されている。P-61は夜間作戦専用に使用するために、多くの機の機体全体が半光沢の黒塗りであった。その外見と強武装から、ブラック・ウイドーと呼ばれる事になる。当時各国で活躍した夜間戦闘機で、このブラック・ウイドーのように、機体全体を黒く塗っていたものはない。ただP-61には一部にこげ茶や灰色に塗られていた機もあり、もしこれらの色が主流であったなら別のニックネームがついていたかもしれない。アメリカを始め多くの国で軍用機にニックネームをつけているが、現在にいたるまでこのP-61のようにクモの名を冠したものは見あたらない。ちなみに日本の夜間戦闘機といえば、海軍の”月光”であった。（図1）

(2) 図2は『ニーチェと哲学的考察』というフランスのペーパーバックの表紙絵です。出典は中世の絵画のようですが明らかではありません。またニーチェとクモの関係も不明です。図3は文春ノンフィクション第2号（1987.12.10発行、106p）の七十三人の視点という章の見出します。原図の写真ではかすかに円網が確認できたのですが、コピーではごらんのとうりになりました。種類はオニグモと思われます。（1989.8.24記）

[クモあれこれ(1)は前号で池田博明・小池牧子の記事を紹介しました。]

クモに関する質問 数ヶ所で、クモのはなしをした時に一般の聴衆から出た質問

クモの棒糸に縫糸をつける結合部はどうなっているのか？ 網は始め糸がたるんでいるがどこでたるみを取るのか？ 隠れ帯のはたらきはなにか？ ナガコガネグモの分散はアリの結婚飛行のよ

うに時期が決っているのか？ 造網の時に切ったタテ糸や足場糸を食べてしまうのか、切って捨てた糸玉は見えるか？ 切って捨てられてしまう糸は最終的なタテ糸よりも細い？ 谷に糸をわたしているクモはどうしてその糸を張ったのか？ 大きなクモをどのようにして採集したらよいか？ 網を毎日張り替えるのか、前の網の糸をどうするのか？

【池】

WATCHING コガネヒメグモの吐き戻し給餌

「わくわく動物ランド」(TBS、1989年8月2日放映)では「コガネヒメグモの吐き戻し給餌」の様子が放映された。母親は生まれた子供に何を食べさせるのかというのが問題で、選択肢は(1)糸、(2)ミルクのようなもの、(3)親の手足。手足と答えた解答者が3名、糸が1名、ミルクが1名。正解は「スパイダー・ミルク」。給餌された子供がやがて脱皮するところ、ガガンボを子供たちが集団捕獲するところも見事に撮影されていた。「学会で発表された」と説明していたが、これは放映の予定が早まったために起こったズレで、実際には8月19日の日本蜘蛛学会宮崎大会で新海明・吉田嗣郎・伊藤浩見によって発表された。【池】

コモリグモの子守り行動

「わくわく動物ランド」(TBS、1989年8月23日放映)では「コモリグモの子守り行動」が放映された。最初に草原を魚をすくう小さな網でたたいているスタッフが映る(実はこの人はネイチャー・シネプロの伊藤浩見さん)。最初の質問は、いったいこの人は何をしているのでしょうかというもの。「虫を捕まえている」等の答があり、イオウイロハシリグモやアズマキシダグモ、ウズキコ、モリグモが登場。ウズキコモリグモが卵のうの代わりにジュズダマをつけてしまったところ、大きすぎる球や立方体をつけてしまって身動きが取れなくなるところや、ダンゴムシをつけようとして苦心するシーンには大笑い。さて問題は「卵のうから出た子グモはどうするか」。小林亜星氏が「コモリという名前からして背中におぶう」と正解(小林氏は全問正解アフリカ旅行!)。子グモが1頭ずつ母グモの背中に乗る様子が写しだされた。【池】

アメリカの蜘蛛のVTR

日本蜘蛛学会宮崎大会(1989年8月19日／20日)で休憩時間を利用して、八木沼健夫氏所蔵のクモのVTRが公開された。1本目はPrism Entertainment Corp.の"NEW WILDERNESS: Inky, Dinky Spider" (nea社、1987年、30分)。ナレーターはローン・グリーン、ハエトリの求愛やアメリカジョロウグモの造網、メダマグモのゴキブリ捕獲、ニワオニグモ、ミドリササグモの子の保護、ナゲナワグモの粘球作製、ジョウゴグモやアメリカジョロウグモがゴミムシの防衛ガスに閉口するところ等、監修にShearが関わっている。

続いて2本目はアメリカのTVから八木沼氏の息子さんが直接エア・チェックした番組(45分位)で、Survival提供の"THE AMAZING WORLD OF SPIDERS"。今度のナレーターはピーター・ユストノフ。案内役はJohn Cooch。オウギグモの捕獲(living bridgeの様子がわかる)、ミヤグモ、サラグモ・ジグモ、ジョロウグモ・ツリガネヒメグモ・Stegodyphus・カニグモの餌捕獲、イソウロウグモの餌盗み(ジョロウの網で)、ハエトリとコモリグモの求愛行動(左右にzigzagに動くのではなく、前後にlinearに動くハエトリが映っていた)。日本産種では前後に動く種は確認されていない)やジョロウ・ツユグモ・タランチュラの交尾、キシダグモの卵のう作製・保護、コモリグモの卵のう運搬、ツユグモの脱皮、ウォツリグモの水面歩行や魚捕獲、ミズグモの捕獲・求愛、クロゴケグモ、アリゾナのタランチュラ狩りバチの狩り、メダマグモの造網・捕獲・捕食等、盛りだくさんであった。【池】

- 会誌掲載: 〒223 神奈川県横浜市港北区新吉田町1523 谷川明男
- 通信掲載: 〒258 神奈川県足柄上郡大井町金手1099 池田博明

会計だより 郵便振替口座 東京 7-74885 東京蜘蛛談話会

△費用額 1989年5月～ (敬称は省略させていただきます)
△費文領 1989年9月中旬 (一般2800円・学生2000円)

1985年(昭和60年度) 佐藤 幸生・築地 満男。

1986年(昭和61年度) 佐藤 幸生・築地 満男。

1987年(昭和62年度)

佐々木勝實・佐藤 幸生・大河内哲二・築地 満男。

1988年(昭和63年度)

林 秀幸・佐々木勝實・佐藤 幸生・大河内哲二・小林 健一・斎藤慎一郎・

小池 牧子・福本 伸男・甲守 崇・新井 弥生・内田 菲咲・福山 研二・

築地 満男・松浦 祐司。

1989年(平成元年度)

西川 喜朗・新海 明・林 秀幸・林 俊夫・佐々木勝實・貝堀 慶治・

大河内哲二・山川 守・斎藤 博・永井 均・小林 健一・斎藤慎一郎・

橋田 重雄・吉倉 真・大石 洋人・小池 牧子・須賀 琢文・福本 伸男・

浅間 茂・甲守 崇・新井 弥生・中井 恒夫・内田 菲咲・浜村 徹三・

谷川 明夫・加藤輝代子・国見 毅久・近藤 昭夫・田副 幸子・岡口 晃一・

築地 満男・徳本 洋・平松 毅久・吉田 哉・池田 泉・池田 千洋・

松浦 祐司・布施 佳子・柳沢 新。

1990年(平成2年度)

橋田 重雄・浅間 茂・新井 弥生・岡口 晃一。

1991年(平成3年度)

浅間 茂・新井 弥生(一部)。

バックナンバ一代領収

飯野 哲夫・小峰 光弘。

寄付

小峰 光弘(1800円)・松浦 祐司(700円)・谷川 明男(葉書コピ一代
2700円相当)。

△員登録
△員移動

(入会)

大石 征夫: 〒184 東京都小金井市戸井南町4-12-3 (小学生)

岡口 晃一: 〒347-01 埼玉県北埼玉郡騎西町牛童354

徳本 洋: 〒921 石川県金沢市泉野出町1-2-6

平松 毅久: 〒350 埼玉県川越市堀2532-1 霊ケ原第1宝コ一ボ 105

池田 泉: 〒258 神奈川県足柄上郡大井町金手1099 (小学生)

池田 千洋: 〒258 神奈川県足柄上郡大井町金手1099 (小学生)

布施 佳子: 〒177 東京都練馬区富士見台3-33-19

柳沢 新: 〒113 東京都文京区千駄木5-5-5 (中学3年生)

(退会)

熊田 理恵(希望退会)、磯島 隆(住所不明・規約適用退会)、

佐藤 幸生(64号で規約適用退会となっていましたが、未納分完納して希望退会)

古沢 笑子(規約適用退会)

(住所変更等)

浜村 鶴三：〒514-23 三重県安芸郡穴源町草生360 野菜・茶葉試験場環境部虫害第一研究室（室長）
 福山 研二：〒305 茨城県稻敷郡基崎町松の里1 筑波農林研究園地内郵便局私書箱16号 森林総合研究所
 林 俊夫：〒376-01 群馬県山田郡大間々町桐原414-1 0277-73-1333

事務局（会計を含む）〒221 神奈川県横浜市神奈川区片倉町199 熊田 審一
 領収証の必要な方は振替用紙通信欄にその旨お書きください。

1988年度会計報告

○収入 1,289,168

前年度繰越	787,720
会費前納	114,800
1988年度前納	81,200
1988年度以降前納	33,600
会費以外	672,920
会費収入 本年度納入	434,400
(前納繰越との和)	549,200
 未納分後納	136,400
本年度分納入	259,200
当年度納入	178,000
前納繰越	81,200
前納	153,600
当年度前納	120,000
前納繰越	33,600
その他の収入	77,048
寄付	40,848
別刷代	7,200
バックナンバ代	29,000
	352,408

○支出

刊行物作成費	203,500	消耗品	16,684
会誌 58号・57号	203,500	封筒・ノリ等	5,924
発送料	115,895	通信用紙	2,500
会誌 58号・57号	49,010	復刻用リーフ用品	6,460
通信 82号・85号	32,620	通信用リーフ用品	1,800
その他	29,265	その他	8,415
事務費	4,615	郵便振替払い出し料	15
事務局事務費	2,815	通信発送手伝報酬	1,000
総会・例会資料	900	総会会場予約	7,400
会費納入状況表	900		
			950,059

○差引残高

上記の通り相違ありません。

1989年5月31日

会計 熊田 審一

監査 林 俊夫 ㊞

監査 松浦 祐司 ㊞

目黒区立駒場住区センター

〒153 目黒区駒場1丁目22番4号

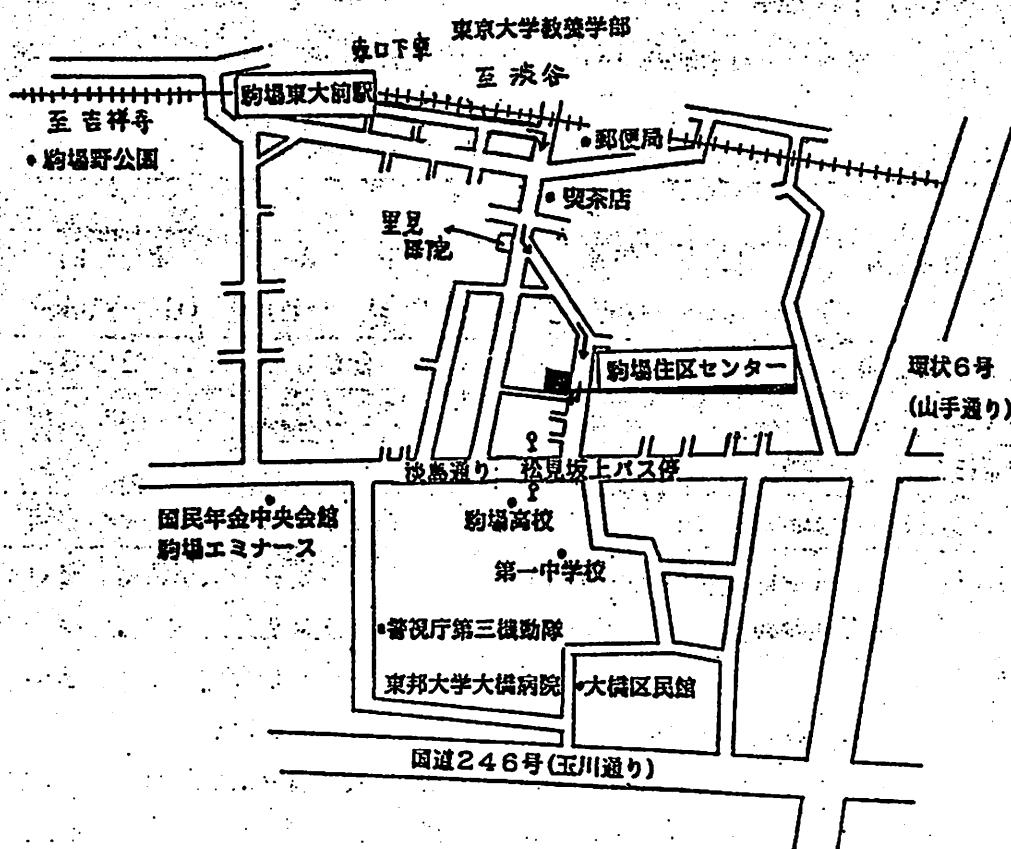
電話 469-2613

交通案内

東急バス (渋谷駅～若林) 松見坂上 下車 徒歩約3分

(渋谷駅～世田谷区民館) 松見坂上 下車 徒歩約3分

井の頭線 駒場東大前駅 下車 徒歩約8分



駐車場はありませんので、自動車による利用は
御遠慮下さい。

クモ研究にかけた半世紀



近く出版される図鑑を手にする千国さん

豊科の千国さん

豊科町のクモの研究家、千国安之輔(せんごく)さん(豊科町成相四八一〇、日本クモ学会評議員)が、国内外で見られるクモのほとんどを網羅した「写眞日本クモ類大図鑑」を近く出版する。中学校の校長を定年退職後、この二十年の間に日本各地からついひとつ採取、撮影した五百四十種類を分類、解説した芳作だ。日本クモ学会の前会長、八木沼健夫・追手門学院大学名誉教授さんは「写眞を使ったクモの本格的な図鑑は世界でも初めて。雌雄をそろえていよいよも素晴らしい。小学生から専門家まで使える、これまでで最も優れた図鑑と仰ぐべき」と高く評価している。

世界初「クモ大図鑑」近く出版

独自の撮影法開発

540種類、雌雄対で収録

図鑑の大きな特徴は、クモにエーテル麻酔をかけて写真を撮る独自の撮影法を開発し、生きたままの姿を、雌雄対で収録した。死後の変色が

出版社は偕成社(東京都新宿区市谷砂土原町)。定価は消費税込みで一万八千八百四十円。

この予定だと、死後の変色が

中学校の理科の教諭をしながら、昭和十五年から半世紀にわたり、クモの研究を続けてきた。四十一年に梓川村立梓川中学校長を最後に定年退職し、後は図鑑作りに没頭。沖縄まで、文字通り全国を駆け巡って、クモ採取の旅を続けた。幼体は自分で持ち帰り、飼育して成体になってから写真に撮り、自分で採取できなかつた種については、各地の研究者の協力で、生きたまま送つてもらひ、などの苦労を重ね、二十余年越しの出版にこぎつけた。「余生をクモにささげたようなもの。クモを嫌う人も多いが、形態、生態は神秘的で不思議だ」と、クモの魅力を語る。

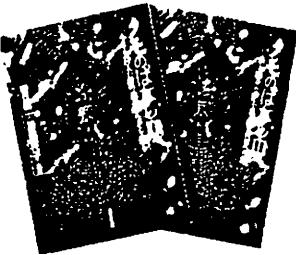
千国さんによれば、「日本に文獻上記録されていなかった種は千種余りだが、その中には、現在確認されていない種も多い。日本で普通に見られるクモは、まずこの本に収めた」という。

図鑑はB5判の上巻で三百二十四頁。使用した写真は約三千枚にのぼる。昨年五月、千国さん自身に撮り、自分で採取できなかつた種については、各地の研究者の協力で、生きたまま送つてもらひ、などの苦労を重ね、二十余年越しの出版にこぎつけた。「余生をクモにささげたようなもの。クモを嫌う人も多いが、形態、生態は神秘的で不思議だ」と、クモの魅力を語る。

この中には、現在確認されていない種も多い。日本で普通に見られるクモは、まずこの本に収めた」という。

図鑑はB5判の上巻で三百二十四頁。使用した写真は約三千枚にのぼる。昨年五月、千国さん自身に撮り、自分で採取できなかつた種については、各地の研究者の協力で、生きたまま送つてもらひ、などの苦労を重ね、二十余年越しの出版にこぎつけた。「余生をクモにささげたようなもの。クモを嫌う人も多いが、形態、生態は神秘的で不思議だ」と、クモの魅力を語る。

「日本生物学」8月号(文一総合出版)



クモのはなし I・II

- 梶谷献二・加藤輝代子編著
 - 四六判 272 + 239頁
 - 技報堂出版
 - 定価 各1442円（税込）

さまざまな“クモの不思議”を、近代生物学の立場からやさしく解説した書。上下2冊、合わせて500ページを超える長さだが、読んでいて少しもあきることなく、クモの巣にかかったようにおもしろさに引き込まれてしまうのは、その“不思議”を語る視点に工夫がこらされているからであろう。クモといえば巣として張りめぐらした網が大きな特徴だが、その網のタイプによって費やすエネルギーにも違いがあるという。生垣などに薄布のような水平の網をつくるクサゲモは、網ひとつつくるために1Hに必要なエネルギーの9~19倍も消費し、皿をふせたような皿網をつくるサラグモのエネルギー消費量は4~8倍。これは、獲物を捕らえるためにつかうエネルギーと言い換えることができそうだ。それにしてもクモの生活は多彩。毛虫やゴキブリと並んで“きらわれもの”的なクモだが、その不思議はなかなか魅力的だ。



クリアリードのすゝみ

はあ びくした
アリがいきなりでつけえ

まつ先にひつがかつたア
りをつかました
ふんきやー
その速さはやっぱやかつた
ぼくはクモのすをけつた
しえト ぼくの足にクモ
ぎよ
なんか樂しくなつてきました

四倍体の雄を発見

鳥取大助 外見は一倍体と同じ

「アントラクセ」にして見
のむしらぬやトウムシの一
種。ヒラバヤシハシに似
色体較が頭部の二倍ある(四
倍体)塊のふくらみと、鷲取

大半の種は、成虫の形態で、
ふね(助ヒト)・生卵(卵)
・卵殻で分かつた。性を決定する
性染色体が分離している動物
では雌性の個体は生卵され

（一）本邦の色彩体感は、日本民族の色彩文化の発達と、色彩の表現力の豊富さから、世界で最も豊かな色彩文化であるといふべきである。

著生するが、染色能が弱い
十人本の四倍体が現れることは
はあった。



苏轼词句注释



卷之三

毎日(農政)・
昭和
'39・4月11日(火曜日)

七 十 三 人 の 視 点

書き手

三月

に刊行致しました

文藝春秋ノンフィクション

の第一号が十月十六日に
発売の運びとなりました

つきましては

皆様方の近況を

紹介致しました

の質問にお答え下さい

アソシエイション作家として

現在番興味を

持つてゐることは何ですか

個人的なことでも結構です

三執筆のことも

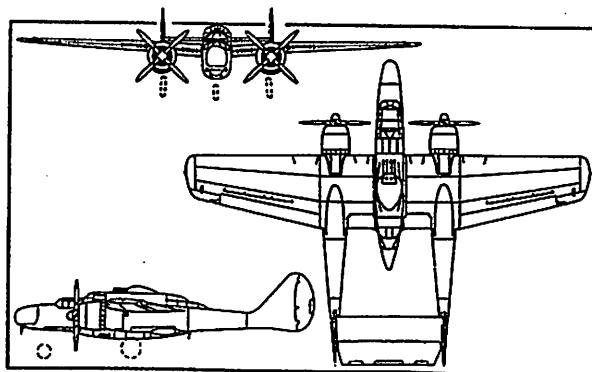
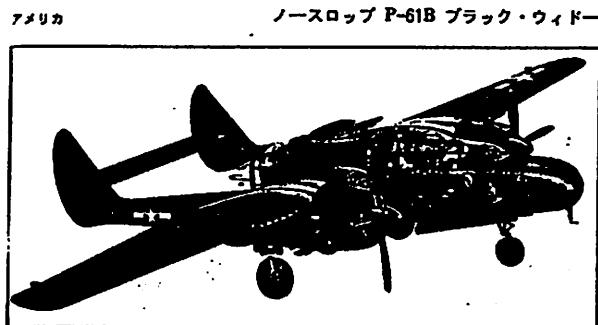
編集部



通信No.67
付録

篠岡氏より

Sarah Kofman



Nietzsche
et la scène
philosophique

小学校教科書の新種発見



坂東治男教諭

阿波の用水に生息

坂東さんの 貴重、保護したい

名前は

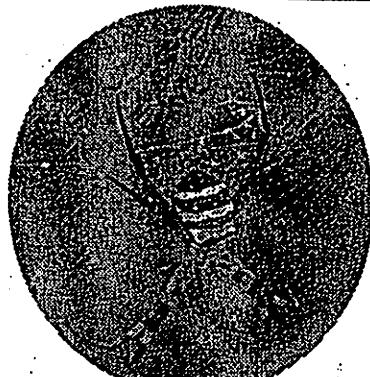
かの理由で壁の壁(れい)ニハヤヒガシナセテ、リ
ド画がくななり、やの壁、本
機物の多い深くいや井水に注
しきだのではなかいかぬ」と
推想(すいそう)してゐる。

大文学部の西川喜朗教授「クモで目的のないのは徐々に日本中でも繁殖しかしない。親になく子供で目があるといふのは初めて聞く。貴な質問だ」と語りこむ。

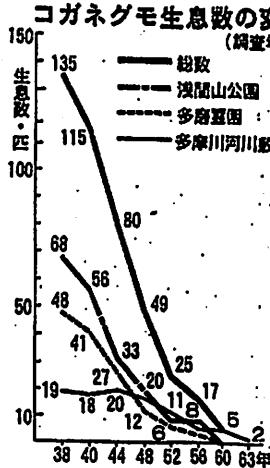
名前はバンドウマシラグモ



湘雅



現在は1匹の生息も確認できなくな
った浅間山公園のコガネグモ
(昭和38年7月、瀬崎さん撮影)



喜多川歌麿

コガネグモ

『クモ博士』萱嶋泉さん調査

「十六日木」は以前の黙
り体は貧窮地と謂ひ田代た
のよい雜木林や河原、庭など
に生む。直接九十才前後の田
形の網を垣間に垂らす。

田舎の代謝器の火
然體質のスバーハー
ないだ。クサを四糸綿
匂ひなど、難題にこ
がれ」
「難題つらうの

講義はなんばほひさん八年か
ら六十三年まで毎年七月に台
計八回、荒船町の浅間山公園、
多摩町の多摩蘿蔭園、谷田の多
摩川河川敷の三カ所で講義し
た。
講義は動植物についていた国立音
楽大学の生物同好会の学生、同大音
楽大学の附属高校の生物部の生徒
が主に参加してやった。

成績調査一四、題名は「新規地区の開拓と生産」。各課題区が資料を提出せねばならぬ。

「行なれ、酒(さけ)木
刈り取れ、越冬中の子牛(こじゆ)
が多頭死滅したと聞聞(きき)
四十年ぶりで、多頭
は横(よこ)ベイながら、越冬山(さん)三
匹(びき)、越冬十一匹(ひき)になった。
四、越冬(えつとう)の「道路や鐵道路(てつどうろ)が

三十八年には四十人が「
る上へ寄たが四十四年と
十六人、四十八年はねね
七人で、五十六年は餘は全
が開いたいがな」と回転。
轉運では「市の腰痛」
帝に反対し「たれやうはせ
つてこた。小なき生れ物
すら方語を尋ねなむれば」、
而て、田舎者のよき本を
用ひ、腰痛散敷せり、「其
の腰痛れぬるより其の腰痛
を遣ひて、と腰代へり。

二 二利とを減開・貰かはあ
りの人そく記圓表 |

— 1 —

府中の街から消えて行く

殺され、樹木や下草の手入れで生息地が奪われた」と分析。五十二年、全国二十、無